

蔡順と王裒の畏雷譚について——二十四孝成立の周辺——

坪 井 直 子

一

室町末に成ったとみられる御伽草子『二十四孝』の有力な典拠の一つに元の郭居敬が撰した『全相二十四孝詩選』がある。その王裒条には、平生雷を畏れた母の墓を、王裒が雷から守る話（以下、畏雷譚とする）⁽¹⁾が、五言四句の韻文と簡潔な散文で次のように記述されている。

王裒

慈母怕聞雷 冰魂宿夜台

阿香時一震 到墓遶千廻

王裒字偉元、至孝奉母、平生畏雷、既死而葬、每遇雷震、

即至墓曰、裒在此、勿懼

二十四孝詩選王裒条の簡潔な記述のためか、或いは、日本では

蒙求「王裒柏慘」が広く享受されたためであろうか、御伽草子王裒条の説話本文は、畏雷譚の前に、非命の死を遂げた父を痛む王裒の涙が父の墓の柏の木にかかり木が枯れる話（以下、泣柏譚とする）⁽²⁾が記されていて、徐注蒙求に拠った可能性を示唆する文章となっている。徐注蒙求はいえ、晋書八十八の王裒伝を典拠として、泣柏譚、畏雷譚に続けて、王裒が蓼莪の詩を三復流涕するため門人がその詩を廃した話（以下、廃詩譚とする）が記述される。晋書には、王裒が墓を恋慕するあまり賊に襲われても逃げず遂に殺されてしまったことも書かれているが、王裒の孝行としては、泣柏譚、畏雷譚、廃詩譚が知られるところであろう。この三つの話柄の中では、泣柏譚が取り上げられることが多く、畏雷譚は必ずしも記述されるというわけではない。徐注蒙求と同様、晋書に拠ったらしい小学は、泣柏譚

と廃詩譚で構成されているし、宋の林同が詠んだ孝詩も同様である。二十四孝詩選は、一つの孝子譚に対して一つの孝行しか採り上げないが、それほど主要な話であるとは思えない畏雷譚を、なぜ二十四孝詩選王褒条は採り上げるのだろうか。

孝子譚の中には、しばしば他の孝子譚と同じ話を共有するものがある。畏雷譚もその一つで、この話は、王褒譚だけではなく、蔡順譚、竺彌譚にもある。中でも蔡順畏雷譚は、孝子伝に採られていたようで広く享受されていたと考えられる。王褒畏雷譚は、蔡順畏雷譚と酷似しているので、蔡順畏雷譚の影響を受けたものであろう。そこで本稿では、蔡順畏雷譚と王褒畏雷譚を比較することから、二十四孝詩選が王褒畏雷譚を採り上げる理由について考察したい。両者の関係は、孝子伝の蔡順畏雷譚から二十四孝の王褒畏雷譚へと交替したと見ることも出来るので、両者を比較することは、二十四孝が成立する背景の一端を明らかにすることにもなるだろう。二十四孝の王褒譚については、黒田彰先生が、源流から二十四孝に至るまでを詳細に検討しているし、蔡順畏雷譚との関わりについても、宋、遼・金の孝子図に描かれる畏雷図が、蔡順か王褒いずれの図であるか判別し難いことを指摘しているので、それを基に考察を進めたい。

二

二十四孝系古資料とそれに関連する王褒畏雷譚と蔡順畏雷譚の記述について確認する。二十四孝系古資料三系統の中で、王褒畏雷譚を載せているのは、二十四孝詩選系二十四孝と、二十四孝詩選系とは二つの孝子譚が替る日記故事系二十四孝の二系統で、これらの系統は孝行録系二十四孝より新しい系統であると考えられている。日記故事系二十四孝の王褒譚は二十四孝詩選系と同じく畏雷譚のみであるが、しかし、日記故事本体に載せられている王褒譚は、徐注蒙求と同じく三つの話柄で構成されている。日記故事諸本の成立は複雑で、早期に刊行された日記故事には巻頭に二十四孝がついていないため、二十四孝は日記故事の本体に後から合併されたものと考えられる⁽³⁾、さらに、日記故事系二十四孝が、日記故事の巻頭に付される以前に、日記故事そのものと深い関わりを持っていたとも考えられている⁽⁴⁾。巻頭に二十四孝がない嘉靖四十五（一五六六）年朝鮮刊の小学日記故事二「攀柏號父」や、巻頭に二十四孝が付く寛文九（一六六九）年版日記故事大全三「攀柏而號」等は、徐注蒙求とは本文であり、また徐注蒙求が晋書の記述を変更した部分が同じであるので、徐注蒙求に拠ったのだろう。

注目されるのは、日記故事本体の蔡順譚にも畏雷譚があるこ

とで、小学日記故事二「聞雷園家」や日記故事大全三「聞雷輒泣」には、次のように畏雷譚が記述される。⁽⁵⁾

・小学日記故事二「聞雷園家」

蔡順母終、停喪在堂、東家失火、順不能移、伏棺而哭、火乃飛於西家、母畏雷、每雷震、順輒園家而泣也。輒即
此以慰母心

・日記故事大全三「聞雷輒泣」

蔡順母性畏雷、身沒、停喪在堂、每聞雷震、順輒園家而泣曰、順在此^{以慰母靈也}、後東家失火、順不能移伏棺、大哭、寧自焚死、家室毫不顧念、火乃飛于西家

母の棺を火災から守る話（以下、飛火譚とする）とともに記されているが、標題からすれば、畏雷譚が主であろう。小学日記故事の畏雷譚は、後漢書三十九周磐傳付蔡順伝の畏雷譚と同文であるが、飛火譚は、準古注蒙求「蔡順分樵」と同文である。⁽⁶⁾ 日記故事大全は、先行する日記故事の本文を改変したものであると思うが、他の文献の影響も受けているかもしれない。

蔡順畏雷譚はまた、孝行録系二十四孝の重要な文献である孝行録前賛二十四章にも記述がある。次に蔡順条の本文と賛を上げる。⁽⁷⁾

蔡順分樵

蔡順、汝南人也、王莽末年、天下大荒、順拾樵、赤黒異器

盛之、赤眉賊見而問之、順曰、黒者奉母、赤者自食、賊知其孝、乃遺米三斗牛蹄一隻

蔡順摘樵、赤黒異齎、赤將自食、黒奉母兮、賊感而遺、斗米牛蹄、母兮平生、性畏雷聲、聞雷雖夜、号繞墳塋、嗚呼孝矣、事死如生

本文は、熟した樵（黒樵）は母の食用、熟していない実（赤樵）は自分の食用、と樵を分けて拾っていた蔡順が、赤眉の賊から逃れることが出来たばかりか、米と牛蹄を贈られた話（以下、分樵譚とする）であるが、賛に分樵譚と畏雷譚が詠まれている。孝行録の本文の来歴は判然としないが、蔡順条について言えば、二十四孝詩選の蔡順条や徐注蒙求の引く旧注とはほぼ同文であることが、橋本氏によって指摘されている。⁽⁸⁾ 賛については、孝行録序で、高麗の権準が工人に命じて二十四孝図を描かせたものに、李斉賢が賛を付けたことを、李斉賢自らが記している。孝行録では、おおむね本文と賛の内容が一致しており、本文にない話が賛に詠まれているのは、曾参条と蔡順条だけである。孝行録の二十四孝図が伝わっていないため、二十四孝図に畏雷譚が描かれていたのか、或いは李斉賢が独自に詠んだのかは分からないが、蔡順畏雷譚が流布していた話であったことは言えるだろう。

日記故事本体や孝行録の記述からは、蔡順畏雷譚が著名な話

であつたことが窺える。このことはまた、畏雷譚が重要な孝行であることも示唆しており、二十四孝詩選系や日記故事系二十四孝の王裒譚が、泣柏譚ではなく畏雷譚である理由を僅かながら示しているといえる。さらに、蔡順畏雷譚と王裒畏雷譚の関わり、また畏雷譚の重要性を考察するべく、畏雷譚の変遷を辿ることにする。

二

畏雷譚は六朝時代に流布した話であるらしい。蔡順畏雷譚は六朝時代の孝子伝図にしばしば描かれるし、王裒、竺彌の畏雷譚、そして類話である雷を畏れる母の為に石室を作った樊重の孝子譚は、管見に入つた資料の中では六朝時代の文献に初出を見る。以下、具体的に各孝子の畏雷譚をみていく。

蔡順は、後漢時代の人物とされ、孝子として非常に著名であり数種の孝行が伝承されている。畏雷譚の最も古いと思われる文献は、汝南先賢伝である。汝南先賢伝は魏の周斐が撰したとされ、隋書経籍志には五巻があつたことが記されている。逸文より、畏雷譚（北堂書鈔一五二、芸文類聚三十五、初学記一、太平御覧十三、事類賦三所引等）、嘗吐譚（母が毒にあたつていないかどうか、母が吐いたものを蔡順が嘗めて確認する話。

太平御覧四一四、初学記十七所引等）、飛火譚（芸文類聚八十、事類賦八所引等）、噬指譚（新拾いに出かけた蔡順を、母が指を嚙んで帰宅させる話。芸文類聚八十所引等）、桔槔譚（後漢書三十九周磐伝付蔡順伝注、太平御覧七六五、九九五、九九八、事類賦二十四所引等）があつたことが確認出来る。汝南先賢伝の畏雷譚は、諸本により校異があるが、北堂書鈔一五二所引のものを上げれば、次のようである。

蔡順母平生畏雷、母亡後、每有雷震、順輒環冢、泣曰、順在此

蔡順畏雷譚はまた、東晉袁山松の後漢書（北堂書鈔一三九所引）や後漢書三十九周磐伝付蔡順伝にも記されている。次に袁山松後漢書と後漢書の該当部分を上げる。

・袁山松後漢書

蔡順母生時畏雷、母死之後、有雷、順走至墓側曰、順在此、太守韓崇恆差車、每雷、順乃乘至冢所

・後漢書

母平生畏雷、自亡後、每有雷震、順輒環冢泣曰、順在此、崇聞之、每雷輒為差車馬到墓所、後太守鮑衆拳孝廉、順不能遠離墳墓、遂不就、年八十、終於家

後漢書は、汝南先賢伝と比較すると、太守韓崇が蔡順のために、雷が鳴るたびに車馬を遣わしたことが加わっている。



図一 C. T. Loo 旧蔵北魏石床

そして、蔡順畏雷譚が流布することになった主因と考えられる文献が、孝子伝である。現在、孝子伝の蔡順譚として確認できるものは、分樵譚、嘗吐譚、助虎譚で構成される陽明文庫蔵孝子伝と京都大学付属図書館清家文庫蔵舟橋家旧蔵孝子伝、嘗吐譚を記す太平御覧八四五所引の逸名孝子伝、分樵譚を記す広事類賦十六所引の逸名孝子伝である。畏雷譚を記す孝子伝は報告されていない。しかし、C. T. Loo 旧蔵北魏石床に描かれた孝子伝図には、「孝子蔡順」という榜題があり、上空の雷神から墓を守る図が描かれている（図一）。蔡順の孝子伝図には、ほかに飛火譚があり、『孝子伝注解』の蔡順図の説明では、「飛火譚、畏雷譚を収める孝子伝があつた筈で、例えば『類林雜説』一・二所収の蔡順譚などが、それらしく思われるが、惜しむ

らくは、出典を記さない」としている。⁽¹⁹⁾

次に、蔡順畏雷譚の影響を受けたと考えられる王褒畏雷譚についてみる。王褒は、魏から西晋時代の人物で、畏雷譚は、東晋孫盛の晋陽秋（芸文類聚二、幼学指南鈔二所引）や東晋干宝の搜神記十一に、次のように録されていたらしい。

・晋陽秋（芸文類聚二所引）

王褒母性畏雷、及母死、每雷震、輒就墓側啓曰、褒在此、褒在此

・搜神記十一

王褒字偉元、城陽宮陵人也、父儀、為文帝所殺、褒廬於墓側、旦夕常至墓所拜跪、攀柏悲號、涕泣著樹、樹為之枯、母性畏雷母没、每雷、輒到墓曰、褒在此

晋書八十八の王褒伝に記されている畏雷譚は、搜神記と同文である。蔡順畏雷譚と王褒畏雷譚の差異は殆どなく、墳墓に向かって「順在此」「褒在此」と呼び掛ける点など酷似している。強いて違いを上げるならば、蔡順畏雷譚が、「家をめぐると記述されるのに対して、王褒畏雷譚は、「墓にいたる」と記述される傾向があることぐらいである。

次に、竺彌の畏雷譚についてみる。急就篇二によれば、竺氏は漢の時に天竺より中国へと帰化した一族らしく、竺彌も北堂書鈔一二九所引王韶孝子伝に「本外国人」とある。竺彌譚は、

王歆孝子伝（初学記一、太平御覧十三等所引）、王韶之孝子伝（芸文類聚二所引）、逸名孝子伝（事類賦三、幼学指南鈔二等所引）にみえる。王歆孝子伝は、隋唐志に記録がないが、王韶之孝子伝は、隋書経籍志に「孝子伝三卷王韶之撰」とあり、劉宋の王韶之の撰とされる。⁽¹⁾ 竺彌譚は、管見に入つた資料の中では、三種の孝子伝以外になく、また北堂書鈔一二九所引王韶孝子伝にある父母を亡くした哀しみで瘠せながらも冬には暖かな服を着なかつた話のほかは、全て畏雷譚となつてゐる。三種の孝子伝に録されている畏雷譚は、ほぼ同文で、初学記一所引のものを上げれば、次のようである。

竺彌字道綸、父生時畏雷、每至天陰、輒馳至墓伏墳哭、有白兔在其左右、遂憂卒

雷を畏れる人物が「父」である点、白兔が登場する点が、蔡順や王褒の畏雷譚と異なるが、帰化したとはいえ外国人も中国の孝子と同様の行為をしている点が注目される。

類話として、樊重が雷を畏れる母のために石室を作つた話をみておきたい。樊重は、後漢書三十二等に事跡があり、光武帝の外祖とされる人物である。畏雷譚は、劉宋盛弘之の荊州記に録されているもので、後漢書志二十二南陽郡湖陽邑注、北堂書鈔一五二、一六〇、芸文類聚二、初学記一、太平御覧十三、五十二、事類賦三、七等に逸文がある。北堂書鈔一五二所引のも

のを次に上げる。

南陽、樊重母畏雷、為石室避之、悉以文石為塔砌、今猶存雷から守る対象が、他の孝子畏雷譚のように親の墓ではなく、生存中の親になつてゐる。この記述を北魏酈道元の水経注二十九比水では盛弘の謬りとしているが、後漢書の樊重伝にはこの記述がないので、六朝時代に出来た俗伝であるかもしれない。

雷に畏怖を覚えるのは万人の共通するところであり、中国でも古くから畏れられていたことは、論衡雷虚篇に詳細な叙述があることから明かで、人に隠れた過失があると雷によつて処罰されると考えられていた。時に人を殺めることもある雷は非常に恐ろしいものであつたろうから、雷から親を守るといふ孝行が生まれたのも自然の成り行きかもしれない。⁽¹²⁾ しかしながら、蔡順、王褒の畏雷譚に墓を守る要素があることと、六朝期に流布したらしいことには注意すべきである。父母や師の死後に一定期間墓を守ることは古来よりの服喪儀礼である。畏雷譚はそれを強調した孝行譚であると言えるが、その孝行譚がなぜ六朝期に流布したのであろうか。このことについては、木島史雄氏が有益な見解を提示している。六朝前期の孝と喪服を礼社会学的に考察した木島氏は、貴族制社会と孝、喪礼、社会制度の關係について、次のように述べてゐる。⁽¹³⁾

孝の称揚は、親子關係の強化をつうじて宗族内の結束を強

化する方策であり、「孝」は、個人同志の関係についての徳目ではなく、各個人とその宗族との関係についての徳目であった。……六朝時代前期は、六朝的な新しい貴族制の確立期にあたり、貴族がその宗族の結束力と伝統をもっとも利用しなければならぬ時期にあたっていたのであった。「孝」はいかにも貴族制に都合のよい徳目であり、かつまた貴族の宗族の結束力強化にきわめて有効に働く徳目であったのである。

流布したのは畏雷譚だけではなく、飛火譚も同様の状況にある。飛火譚は、東觀漢記十六の長沙義士古初の記述を初見とするが、蔡順の後漢書の伝や孝子伝図にもあつて流布したらしく、顔含、劉殷、何琦伝（晋書八十八等）にもみえる。社会制度の要請もあり、畏雷譚や飛火譚は、喪礼の模範として取り扱われたものであろう。そして、畏雷譚や飛火譚の媒体に孝子伝があつたことは、蔡順の孝子伝図から推して容易に想像出来る。西野貞治氏は「孝行の実践例を掲げた孝子伝・孝子図などと題する書が、孝経と共に童蒙の必修書とされ、六朝末迄に十種以上も出現した」と述べている。⁽¹⁴⁾東晋の成帝や梁の武帝は孝子伝を大切にしていたようであるから、⁽¹⁵⁾孝子伝が果たした役割は大きく、その規範は後世へも影響しているのだろう。

四

貴族制社会は、六朝時代から唐代にまで及ぶ。唐代においても、六朝時代と同じく、孝の実践が称揚されたことは、則天武后が、章坏太子のために少陽政範とともに孝子伝を選び与えたことや（旧唐書八十六、新唐書八十一）、唐代に編纂された晋書八十八孝友伝序に、前代の孝子の事跡が列挙されることから推察出来る。また晋書孝友伝では、王褒の伝記があり、また蔡順の名もみえて、畏雷譚が享受されていたことが窺える。しかし、唐代の畏雷譚の様相を考察するにあたり、注意すべきは、私撰の類書や幼学の書であろう。類林系の類書や古注蒙求は、二十四孝系資料に繋がる要素を含むと考えられる。二十四孝系古資料の王褒畏雷譚について、黒田先生の重要な指摘があるので、それを基に王褒と蔡順の畏雷譚を検討する。

趙子固二十四孝書画合璧の二十四孝系古資料における、本文上の問題について精査された黒田先生は、王褒条にある「勿懼」について、次のように述べている。⁽¹⁶⁾

面白いのは、……王褒が墓中の母に呼び掛ける言葉「勿懼」で、二十四孝系古資料特有の表現らしいのだが、溯れば敦煌本竊金に、「莫怕」、敦煌本逸名類書P・三三三六V及び、P・三三八〇V（それぞれ『敦煌変文集』所収孝子

伝の底本丙卷、丁卷に当たる）に、「勿驚」等と見えることである。さらに言えば、全相二十四孝詩選の詩第一句、

「慈母怕聞雷」も、P・三五三六V、P・三六八〇Vの末尾詩第一句、「王褒慈母怕雷声」辺りに淵源するようで、

二十四孝成立史の研究上、敦煌文物の果す役割の究明が今後の重要な課題となりそうだ。

敦煌本藏金仁孝篇「畏雷」では、次のように王褒と蔡順の畏雷譚が並記される。¹⁷⁾

王褒、蔡順母並畏雷、若天雨雷振（震）、褒即奔往、繞墳哭、兒此在、兒此在、願嬢莫怕

本文では王褒畏雷譚を基に述べているが、賛では「隱々驚雷、震荒墳而騰蔡室」とあって、蔡順畏雷譚が詠まれているので、両者ともに知られた話であつたと思われる。蔡順は、敦煌本藏金では、嚙指譚が曾参のそれとともに記され、賛には分樞譚も詠まれている。賛に分樞譚と畏雷譚が詠まれることは、孝行録賛や孝行録系二十四孝図が、分樞譚と畏雷譚を取り上げることと同じで、二つの話柄は広く享受された話であつたことが窺える。敦煌文物では、蔡順畏雷譚は、敦煌本事森（『敦煌変文集』所収孝子伝¹⁸⁾の類書系断簡）と、敦煌本語対「孝感」の「火飛」にも、次のようにみえる。¹⁹⁾

・敦煌本事森

蔡順、字君長、汝南平輿人也、少失其父、独養老母、王莽末、天下飢荒、緣桑摘椹、赤黑易器盛之、赤眉賊見、向前問之、答曰、黑者奉老母、赤者自供、賊等見、知是孝子、遂不斂順、米三升、牛蹄一雙、将奉賢母、順母曾至婚家、飲酒過度、嘔吐顛到、順恐母青、自嘗其吐、母後命終、停喪堂上、東家火起、与順屋相連、独身不能移動、乃伏棺号泣、火遂飛過、越燒西家、一時蕩盡、順母生時怕雷、每至大震雷電、順便走繞墳大哭曰、順在此、願嬢莫驚、太守聞之、若遇天雷、給順車馬、令往墓所、太守韓置用順為南閣祭酒。出後漢書

・敦煌本語対

蔡順字君仲、汝南人、少失父、孝養老母、後母亡、停喪在堂、東家失火、以順屋相連、独一身不能移動、伏棺号泣、火遂飛過、越燒西家、一時蕩盡、順母生時畏雷、後每雷鳴、順走就塚、呼曰、順在此

敦煌本事森は、分樞譚、嘗吐譚、飛火譚、畏雷譚で構成され、類林雜説一の蔡順譚と同じ構成である。出典注記として「出後漢書」とあるが、分樞譚、嘗吐譚は、後漢書にはない。また、「太守韓置用順為南閣祭酒」が、後漢書では飛火譚の末尾に位置するのに対して敦煌本事森では畏雷譚の末尾に位置するし、

前の部分で「太守」とするのに対して「太守韓」としていて後補の痕跡がある。敦煌本語対は、飛火譚と畏雷譚で構成され、さらに古初の飛火譚が続く。

二つの文献はともに類林系とされ、比較すると、飛火譚は特に近似しているが、問題にしている「勿懼」に対応する表現が、敦煌本事森には「願嬢莫驚」とあるのに、敦煌本語対にはない。「勿懼」等の表現は、類林系とみなされる古注蒙求や類林雜説にもなく、敦煌本事森による独自の増補ともとれるが、しかし、蔡順が母の墓へと向かう部分の記述で、敦煌本事森の「繞墳大哭」と、敦煌本竊金の「繞墳哭」が一致するのを見ると、やはり、この系統と関わりがあるのではないかと思われる。

「繞墳哭」について若干のことを付け加えるならば、これは、汝南先賢伝や後漢書の「園冢泣」に由来するものである⁽²⁰⁾。敦煌本語対に「就塚」とあり、古注蒙求に「遶塚行」とあるのが、傍証になるのではないか。「繞墳哭」は、「哭」に相当する部分がないことも多く、表現が多少異なる場合もあるが、類林雜説に「繞墳」とあり、唐の晁良貞が、喪中に堂で犬に懲罰を加えた件を判じた文章（古今事文類聚別集十一「父在杖堂上判」等）に「蔡順有繞墳之感」とあるのを見ると、「繞墳」として、畏雷譚の定型となっていたようだ。孝行録の賛の「繞墳塋」や、二十四孝詩選の詩の第四句「到墓遶千廻」は、この流れを

汲むものであろう。

さて、敦煌本逸名類書 P・三五三六 V、P・三六八〇 V の王褒畏雷譚もみておこう。P・三五三六 V 等は、変文系の断簡で、二十四孝系古資料と密接な関係があり重要な資料である。次に P・三五三六 V の王褒条を上げる（P・三六八〇 V も参照）。

王褒者、魏郡人也、養母至孝、母後命終、日夜培墳、墳側有松柏樹、褒若向墳啼哭、其樹為之変色、枯悴不同常日、母生在之日、常怕雷聲、王褒每聞雷驚、即便奔赴墓所告曰、褒今在此、願嬢勿驚、詩曰

王褒慈母怕雷聲、每至春間不得寧

及至百年亡没後、語墳猶怕阿娘驚

泣柏譚と畏雷譚で構成されるが、注目されるのは賛が畏雷譚であり、泣柏譚よりも畏雷譚が主となっていることである。この偏重は、やはり蔡順畏雷譚の影響によるものではないだろうか。P・三五三六 V 等の「母後命終」「母生在之日、常怕雷聲」が、敦煌本事森の「母後命終」「順母生時怕雷」と近似している点は一証左となろう。

P・三五三六 V 等に王褒畏雷譚があることは、宋以後の畏雷譚の展開を考える上で重要である。先にも述べたが、P・三五三六 V 等は、孝行録系二十四孝と深い関連にあり、また変文体の文章であることから王褒畏雷図があったことが推定出来る。

また、変文といえは仏家の関与が疑われ、二十四孝押座文が想起される。道端良秀氏が

二十四孝の押座文に続く本講ともいうべき、二十四孝の俗

文、変文ともいわれる讃嘆文があつたことが想像される

とした⁽²¹⁾、その二十四孝の変文がP・三五三六V等ではなかつた

かを、かつて論じたことがある⁽²²⁾。おそらく、六朝時代から唐代

にかけて孝子伝の蔡順畏雷譚が流布していたのが、P・三五三

六V等のような二十四孝関連の変文の出現によって、王裒畏雷

譚もまた流布し、宋代以後は、蔡順畏雷譚よりも王裒畏雷譚の

ほうが優勢になつたのではないかと考えるのである。

ここで泣柏譚についても少し考えてみたい。泣柏譚は、晋書

等では王裒の涙で父の墓の柏が枯れるのに対し、P・三五三六

V等では、松柏が変色する話（以下、泣柏変色譚とする）とな

っている。柏が変色する話は、王隱晋書（芸文類聚八十八、太

平御覧九五四、事類賦二十五等所引）や、晋陽秋（西夏本類林、⁽²³⁾

類林雜説三、敦煌本事森（S五七七六）所引）を源とするらしい。

黒田先生は、P・三五三六V等の泣柏変色譚を、「母親の

話に転じたものらしい」とし、⁽²⁴⁾王裒の泣柏変色譚の伝流を考え

る際には、蒙求注に注目すべきであるとしている。泣柏変色譚

である蒙求は、古注蒙求で次のようである。⁽²⁵⁾

晋書王褒、字元偉、父褒在、廬於墓側、泣涕沾松柏、松柏

為之色慘、每誦詩、至哀々父母処、常皆反復流涕

P・三五三六V等と「松柏」が変色する点が同じである。興味

深く思うのは、古注蒙求と、晋書或いは搜神記の王裒譚が部分

的に重なることで、「廬於墓側」は搜神記等「廬於墓側」とは

ほぼ同文であり、且つ、「松柏為之色慘」が、搜神記等「樹為之

枯」の語順と同じとなっている。⁽²⁶⁾古注蒙求はまた西夏本類林等

所引の晋陽秋とも共通する部分がある。王裒の字を、搜神記等

多くの文献が「偉元」とするのに対し、古注蒙求や西夏本類林

等所引晋陽秋はともに「元偉」とする。古注蒙求のこのような

あり方は、当時の民間における王裒譚のあり方を反映している

と思われる。P・三五三六V等の泣柏譚と共通する要素がある

ことを考えても、その可能性は高いだろう。先学も指摘してい

ることではあるが、孝子伝、二十四孝を考える上で、蒙求は重

要な文献であると言える。⁽²⁷⁾

なお、敦煌本不知名類書甲「補孝」の「墳樹変色」は、次の

ように、母の話、また「松柏」となっているなど、P・三五三

六V等と一致し、両者は密接な関わりがあると考えられる。

墳樹変色、晋王裒於母墳哀號哭泣、應墳園、松柏為之枯瘁

変文が類書と近い関係にあったことは、舜の孝子譚の展開等か

ら推定出来るが、これもその一例と言えるだろう。

ところで、「勿懼」に相当する表現を持つ畏雷譚が日本の文

献にも見られる。源平盛衰記三十一には、次のような王褒畏雷譚があり、「恐レ思給フナ」という表現がある。⁽²⁸⁾

王褒ト申者、昔唐土ニ有ケリ。其母生タリケル時、余ニ雷ニ恐ケリ。母死テ後雷ノキビシク鳴時ゴトニ、必母ノ墓ニ行テ、王褒是マデ參テ侍、雷電ノ音恐レ思給フナト、声ヲ挙テ泣シカバ、雷鳴ヲ止ケリ。其母夢ニ来テ悦ブ色、タビ／＼有ケルトカヤ。至孝ノ志深キ時ニハ、古今上下懸ルタメシモ有ケリ。

蓬左本、全史本では王褒ではなく蔡順とするという指摘が水原氏にある。この話が、本来どちらの孝子の話であつたのかは定かではないが、水原氏は蒙求「王褒柏惨」「蔡順分樵」注にある畏雷譚の伝流に着目して、「『蒙求』注の伝流も複雑であるが、盛衰記の異人同話の引用も奇怪で興味ある問題を提示している」と述べている。⁽²⁹⁾ 蒙求注は注意すべき文献であるが、現存する伝本には「勿懼」に相当する表現はないことが注意される。このことは孝行集の蔡順条にも指摘出来る。

孝行集は、黒田先生が紹介された本で、静嘉堂文庫に蔵される慶長四年（一五九九）写の、三国の孝子の因縁譚四十条からなる中世唱導資料である。黒田先生は、孝行集蔡順条が、古注蒙求と話順、話柄が一致することを示した上で、「孝行集の蔡順譚は、古注蒙求に基づくものと判断される」としている。但

し、敦煌本事森や類林雜説には留意して、古注蒙求のような内容を持つ孝子伝の存在も推定している。⁽³⁰⁾ 古注蒙求と孝行集蔡順条を次に上げる。

・孝行集

蔡順カ孝事。夫彼蔡順、孝行尤切也キ。其故、有時、殊外世上飢饉ニテ、母可養物ナシ。去ハ、有時、山行菓拾ニ、器ニツニ入ル、ニ、一、能々シユクシタルヲ入。ニ、不熟ヲ入。サテ帰途中テ賊会、彼盗人此体ヲ不審ラスル様ハ、何ニ迎、二菓ハ拾分タルソト問ハ、答云、是別義アラス。能ク熟シタルハ、母与為也。亦、不熟ハ、妻子等与為也云。時、盗人ナレトモ、順孝行志ヲ感而許ケル也。サテ、彼カ母臨終時節、憐家俄火出、ハヤ吾カ家移トモ、可消様ナシ。然、順、母上イタキ付テ悲ケレハ、頓火消安穩ナリキ。又、平生此母、雷電ヲソル、事、不常。此故、死後墓行、雷ナル時、我此アリ。畏下ヘカラス云。此事、大王迄及聞召、既過分車馬被下ケルトナム。此心哥、露消跡コサ、ニウツラネハ野辺ヲ焼火心有ケリ云。

・古注蒙求

後漢蔡順、字君平、王莽末、天下大荒、順拾桑樵、赤黒異器盛之、赤眉賊見而怪問之、順曰、黒者与母、赤者自食、賊知其孝、遣順米三斗牛蹄一隻、乃母終、停棺堂上、東家

失火、屋相連、順一身不能動、伏棺上而哭、火飛過西家、母生時畏雷、每有雷、順即遶塚行云、順在此、太守聞之、給事車馬也

孝行集には、古注蒙求にはない「畏下ヘカラス」という表現があることが分かる。敦煌文献にあるような「勿懼」がある畏雷譚が日本にも伝えられていたのであろう。この蔡順譚で想起されるのは、古注蒙求と近似する敦煌本事森の蔡順条には「願嬢莫驚」という表現があることである。敦煌本事森の蔡順譚は、孝子伝ではないかと思われる類林雜説の蔡順条とも近似している。想像をたくましくするならば、「勿懼」がある蔡順譚を収録する孝子伝があり、それが日本へも将来されていたのではないかと思う。黒田先生は、日本の孝子伝受容について、「陽明本、舟橋本両孝子伝の他、敦煌本とも気脈を通じる第三、第四の孝子伝が平安時代に行われ、存外多様な孝子伝の奔流を形作っていたのではないか」と述べている。⁽³²⁾「勿懼」がある蔡順譚、或いは王裒譚かもしれないが、このような畏雷譚を収録する孝子伝の存在を考えても良いだろう。

五

宋、遼・金の孝子図は、孝行録系の二十四孝に拠って描かれ

たものらしく、洛陽北宋張君墓画像石棺⁽³³⁾などは、孝行録前贊二十四章の孝子と一致する。しかし、中には、孝行録系にはない畏雷譚が描かれているものがある(図二)。その図につけられた榜題は二通りあって、河南鞏西村宋代石棺に「蔡母怕雷」とあるように蔡順とするものと、山西永濟金代貞元元年青石棺に「王怖」とあるように王裒とするものがある。⁽³⁵⁾この二通りがあることに、黒田先生が「榜題のない二十四孝図を扱う時、蔡順と王裒の畏雷譚は、一体どのように区別すればよいのであろう」とした厄介な問題が起きる。二十四孝は、「数の限定され



図二 河南登封黒山沟宋代壁画墓

ない孝子伝」と違い、「孝子の数が限定」されている。このことを考慮するならば、一つの孝子に対して一つの図という規制が基本的にあると推定される。「蔡母怕雷」とする河南鞏県西村宋代石棺の孝子図の傍題には、二十四孝図には殆どの場合に描かれる蔡順の分攄譚が無いことは証となるだろう。したがって、二十四孝図の中に、蔡順の分攄図がある場合の畏雷図は、王裒の図としてよいのではないだろうか。このようにして考えると、多くの畏雷図が王裒図であると考えられる。⁽³⁶⁾王裒図が多いであろうことは、P・三五三六V等の変文系断簡のこととも合致するであろう。それでは、蔡順の畏雷図については、どのように考えたら良いのだろうか。このことを考える手掛かりが、山西潞城県北関宋代磚雕墓の二十四孝図にある。⁽³⁷⁾宋・金の孝子図では、象や鳥が歴山で働く舜を助けたという象耕鳥耕譚を描く。しかしながら、この宋墓の舜図は、父母が舜を井戸に埋めようとする掩井譚を描いている。掩井譚は後漢から六朝時代の孝子伝図に描かれる話であるから、この舜図も孝子伝図であると考えられる。とすれば、二十四孝図の中に、孝子伝図が描かれることもあったよう⁽³⁸⁾で、蔡順の畏雷図もそのような図の一つであるかもしれない。⁽³⁹⁾元来、二十四孝は、孝子伝を母体としているから、二十四孝図の中に孝子伝図があったとしても不思議ではなく、かえって孝子伝からの流れを確認することが出

来るだろう。

宋、遼・金の孝子図を見ると、地下水脈のように畏雷図が伝えられていることが分かる。孝行録賛の蔡順畏雷譚、また、二十四孝詩選系や日記故事系二十四孝の王裒畏雷譚は、その流れが表出したものと考えられるのである。

付記

金文京先生より、遼耶律羽之墓（一九九二年、内蒙古自治区阿鲁科尔沁旗罕蘇木蘇木で発掘）出土の折肩孝子図鑲金鑿花銀壺に描かれた二十四孝とみられる孝子図をご教示いただいた（中国歴史博物館、内蒙古自治区文化庁編『契丹王朝——内蒙古遼代文物精華』（中国蔵学出版社、二〇〇二年）。孝子図は八面あり、その中の一面が畏雷図を描く。この孝子図は、墓誌より遼会同四年（九四一）頃のもの⁽⁴⁰⁾と推定され、管見に入った二十四孝図の中では最も古く、唐末五代の二十四孝を考える上でも貴重な資料である。金先生に感謝申し上げますとともに、ここに報告しておく。

註

（一） 禿氏祐祥氏解説『二十四孝詩選』（全国書房、昭和二十一年）に拠る。

- (2) 黒田彰先生「二十四孝原編、趙子固二十四孝書畫合璧について」『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成十三年）Ⅲ4、（初出は『説林』48、平成十二年三月）。
- (3) 橋本章子氏「日記故事」の版本について——二十四孝図研究ノートその三——」（『人文論叢』46、平成十年一月）
- (4) 黒田彰先生「二十四孝の成立——全相二十四孝詩選と日記故事——」註（2）前掲書Ⅰ二一
- (5) 小学日記故事は蓬左文庫蔵本に、日記故事大全は長澤規矩也氏編『和刻本類書集成』3（汲古書院、昭和五十二年）所収影印に拠る。
- (6) 準古注蒙求「蔡順分樵」は次のようである。（池田利夫氏編『蒙求古註集成』上（汲古書院、昭和六十三年）所収、応安頃刊五山版に拠る）。
後漢蔡順、王莽末天下大荒、順拾樵赤黒、異器盛之、赤眉賊見而問之、曰黒者奉母、赤者自食、賊知其孝、乃遺米三斗牛蹄一隻、及母終、停喪在堂、東家失火、順不能移、伏棺而哭、火乃飛於西家
日記故事本体には、蔡順譚として他に、小学日記故事二に、噬指譚があり、小学日記故事二や日記故事大全三に、分樵譚がある。後漢書の蔡順伝は噬指譚、飛火譚、畏雷譚で構成されているが、日記故事本体の噬指譚と畏雷譚とは後漢書と一致する。
- (7) 黒田彰先生註（2）前掲書所収南蔡文庫蔵本影印に拠る。
- (8) 橋本章子氏「孝行録」と「全相二十四孝詩選」所収説話の比較——二十四孝図研究ノートその二——」（『人文論叢』44、平成八年一月）
- (9) 先賢伝に関連して付け加えるならば、太平御覧九七三に「汝南仙賢伝」として分樵譚があり、また太平御覧九三五や事類賦二十九に「先賢伝」として、母の墓に神魚を祭る話がある。「汝南仙賢伝」は太平御覧所収のものしか管見に入らなかったが、分樵譚は東觀漢記にも録され、後漢に起源を求めることが出来るから、「汝南仙賢伝」は「汝南先賢伝」の誤字であるかもしれない。「先賢伝」については、手掛かりを得ることが出来なかつた。蔡順の孝子譚には、墓を守る蔡順が、虎の喉の奥に引つ掛かつた骨をとる話があるが、この話は『孝子伝注解』によれば、「中国における源流に当たるものが見あたらない」とされ、郭文挙の助虎譚が、蔡順譚に転用された可能性が指摘されている。祭魚譚も助虎譚のように、蔡順の墓を守る話が改変されて出来たものかもしれない。なお蔡順の助虎譚は、陽明文庫蔵孝子伝、舟橋家旧蔵孝子伝の他に、輿地紀勝一五〇「蔡順廟」にもある。
- (10) 幼学の会編『孝子伝注解』（汲古書院、平成十五年）「蔡順」図像資料。注解も併せて参照されたい。
- (11) 黒田彰先生は、王歆孝子伝唯一の竺彌条を王韶之孝子伝の逸文とし、王歆孝子伝の存在を否定している（『古孝子伝作者攷——付 改訂古孝子伝逸文一覽』（『京都語文』11、平成十六年十一月））。
- (12) 莊司格一氏に、雷が死者と関わる事が指摘されている（『中国中世の説話——古小説の世界——』（白帝社、平成四年）五）。畏雷譚に墓守の要素があるのは、このことも関係するのかもしれない。
- (13) 木島史雄氏「六朝前期の孝と喪服——礼学的目的・機能・手法——」小南一郎氏編『中国古代礼制研究』（京都大学人文科学研究所、平成七年）
- (14) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について

て」(『人文研究』7・6、昭和三十一年七月)

- (15) 金樓子二には、東晋の成帝が自らの陵について、曲礼一卷、孝經一秩、孝子伝及び陶華陽劍一口を随装品とするよう指示したとあり、梁の武帝の孝思賦には、武帝が孝子伝を読む度に悲恨し嗚咽したとある。

- (16) 黒田彰先生註(2) 前掲書

- (17) 『敦煌宝蔵』影印に拠り、王三慶氏『敦煌類書』(麗文文化事業、一九九三年)を参照した。

- (18) 藩重規氏『敦煌変文集新書』(文津出版社、一九九四年)巻八「孝子伝」

- (19) 敦煌本事森は『敦煌宝蔵』影印に拠り、藩重規氏註(18)前掲書を参照した。敦煌本語対は、『敦煌宝蔵』影印に拠り、王三慶氏註(17)前掲書を参照した。

- (20) 札記檀弓下に、延陵季子が長子を葬るに際して、呉の礼に習い、左袒して封(墳)を右還し号哭すること三回であったという記述がある。孔穎達は、右還を「繞墳」と解しており、墳墓をめぐる孝行には、礼記が関わるのかもしれない。

- (21) 道端良秀氏「二十四孝と仏教——二十四孝押座文について——」『唐代仏教史の研究』(法蔵館、昭和四十二年、二刷)三章二節の補遺

- (22) 拙稿「睽子探源——二十四孝成立史のために——」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』1、平成十二年三月)

- (23) 西夏本類林所引の晋陽秋を上げれば、次のようである(史金波、黄振華、聶鴻音氏『類林研究』(寧夏人民出版社、一九九三年)に拠る)。

王褒又名元偉、謂魏国高貴郷公朝司馬文公國干執時、王褒之父儀不應、文公行為殺王褒父、葬捨畢後墓前面室一為、

夜朝哀思、墓前柏樹二十樹有、色皆慘悴、餘樹与不倣、此事晋陽春秋文中説

なお金樓子一等には、梁の武帝が山陵を拝した時の涙で松が変色した話が載る。

- (24) 黒田彰先生註(2) 前掲書

- (25) 註(6) 前掲書所収真福寺蔵本に拠る。

- (26) 晋書八十八孝友伝や搜神記十一に録される孝子譚については、大橋由治氏に論がある(『搜神記』と孝子説話について)(『大東文化大学漢学会誌』36、平成九年三月)。

- (27) 蔡順分樞譚についても蒙求は注目すべき文献で、蒙求の「米三斗牛蹄一隻」は、敦煌本事森の「米三升牛蹄一隻」と類似し、また千字文注「老少異糧」の「米五斗牛一蹄」とも類似する。参考までに千字文注の蔡順譚を次に示す(元和版に拠る)。

老者食精細、少者食麤糲、蔡順年十二、孤養老母、王莽時、天下荒險、人皆飢餓時、赤眉賊起、殺人而食、順在田中摘椹、黒者一器盛之、赤者一器貯之、路逢賊、見二器盛椹、賊問之、順曰、黒者供老母、赤者自食之、賊相謂也、此孝子也、遂放之、更与米五斗牛一蹄、以食供母、賊曰、此村有孝子、相牽不過其境也

- (28) 源平盛衰記は、美濃部重克、榊原千鶴氏校注『源平盛衰記』

6(中世の文学、三弥井書店、平成十三年)に拠った。

- (29) 水原一氏「盛衰記考定余録(二)」(『新定源平盛衰記』5、月報5、平成三年二月)

- (30) 黒田彰先生「静嘉堂文庫蔵孝行集について」(『中世説話の文学史的環境』(和泉書院、平成七年)I三(初出は『説話論集』一(清文堂出版、平成三年))

- (31) 孝行集は、黒田彰先生「静嘉堂文庫蔵孝行集」(『愛知県立大

学文学部論集(国文学科編) 39、平成三年三月) 翻刻に、古注蒙求は、註(6) 前掲書所収真福寺本に拠った。

(32) 黒田彰先生「重華外伝——注好選と孝子伝——」註(2) 前掲書Ⅲ二(初出は『説林』46、平成十年三月)

(33) 黄明蘭、宮大中氏「洛陽北宋張君墓画像石棺」(『文物』、一九六一年十一月)、中国美術全集絵画篇19(上海人民美術出版社、一九八八年) 等

(34) 鞏県文物管理所、鄭州市文物工作队「鞏県西村宋代石棺墓清理簡報」(『中原文物』一九八八・一、一九八八年三月)

(35) 張青晋氏「山西永濟發現金代貞元元年青石棺」(『文物』一九八五年八月)。なお、鄭州市文物考古研究所、登封市文物局「河南登封黒山沟宋代壁画墓」(『文物』二〇〇一年、十月)の畏雷図の説明は、「王亦聞雷泣墓」(傍点稿者)としている。

(36) その他の王褒図については、黒田彰先生「孝子伝の図——宋、遼・金を中心とする——」註(2) 前掲書Ⅱ三(初出は『京都語文』7、平成三年五月)を参照されたい。

(37) 王進先、陳宝国氏「山西潞城縣北関宋代磚雕墓」(『考古』一九九九年五月)

(38) 孝子伝の舜図については、幼学の会註(10) 前掲書の舜の図像資料を参照されたい。

(39) 趙超氏によれば、唐代の孝子伝図と考えられる図の中には、王褒の墓を守る図がある(「樹下老人」与唐代的屏風式墓中壁画)『『文物』二〇〇三年二月)。

図1は、C. T. Loo & Co. An Exhibition of Chinese Stone Sculptures (New York, 1940) に拠り、図2は、註(35) 前掲の『文物』(二〇〇一年、十月) に拠る。

話柄の分類については、黒田彰先生註(2) 前掲書及び幼学の会註(10) 前掲書を参考にした。また、引用に際しては私に漢字仮名を改め句読点等を施した。